





歴史語言研究所・文物陳列館

ジウムや軽食会（ただし飲み会はありません）への参加、ホストとなってくださった劉淑芬老師の御紹介による研究発表などの機会で、多くの方々と知り合うことができました。また、以前から知遇を得ていた台湾人研究者や、研究院の持つ近隣大学との太いパイプのおかげもあり、台湾大学・台北大学・暨南国際大学でも同様に発表することができました。

史語所の収蔵資料について言えば、有名な故宮博物院にはもちろん及びませんが、多くの貴重な石刻拓本があり、そして何より台湾・大陸の論文検索ダウンロードサイトのほとんどを正規に利用できるネット環境が、こうした予算の細る日本の研究者にとってはまさに天国のようでした。これら史資料を実見し、論文を複写またはダウンロードして持ち帰ることが、当初の私の目的だったのです。

### 居住地天母での生活、祠廟巡り

このように恵まれた研究環境ではありましたが、実は一方で私にはある問題がついて回りました。研究院と自宅との、片道90分、乗り換え3回に及ぶ通勤時間です。

私の在外研究は妻と小学生の子供二人をともなっているものであり、戦前からの日本人街で日本人学校も間近にある天母地区に居を構えることは、治安の良い台湾とはいえ必須のことだと思っていました。ところがその結果としての先の通勤時間が、いざ実行してみると予想以上にきついのです。地下鉄・バスとも台湾では日本より運転が荒く、頻繁な急発進・急加速が90分間の疲労をいや増します。加えて台湾

社会では子供の一人歩きが許されず、妻も子供も中国語力は皆無とあって、私自身があまり家を空けられず、せっかくたどり着いた史語所から16時半には帰途に着くのが日課でした。これではあまりに時間が惜しい。

結局私は思い切って、一年間の目標を「家族旅行でも見て回れる祠廟を、できるだけ数多く実見する」ことに変えました。祠廟とは中華圏における道教や民間信仰の施設で、小は小屋のようなやしろから大は壮麗な伽藍まで、複数の神々を祀り老若男女が参拝しています。院生時代にも一年間、大陸の杭州に留学しあちらの祠廟を多少なりとも見ていた私には、祠廟・寺院と言え第一に「史跡」であり、生きた信仰の場には思えませんでした。ところが台湾では街中でもまるで商業店舗のように祠廟が叢生し、小さいながらも隅々まで整備された施設の中で、熱心な参拝者とボランティアらしき信徒が日々香を灯しています。何より驚いたのは、一見物欲ギラギラで現世利益的なはずのその場所に、大陸と違って拝観料・入場料といったものがおおよそ無く、お布施も何もかも一切が参拝者の意志に委ねられていることでした。

こうした祠廟を近隣からしらみつぶしに見ていけば、千年もの昔の中国前近代史を専門とする自分にとっても、史料とはまた違った何かを得られるのではないかと。かくして私は研究所には週二、三日、残りの日は中国語教室か祠廟巡りにあて、子供らの長期休暇には家族こぞって台湾各地を旅行して、とにかく祠廟を見て回りました。実見できた祠廟・寺院を地域ごとにまとめれば以下の通りです。なお、類似の名称も多いため一部には地名を冠しました。

〈台北〉天母三玉宮、台北孔子廟、大龍峒保安宮、台北霞海城隍廟、台北天后宮、武昌街台湾省城隍廟、松山進安宮、松山慈祐宮、南港富南宮、中央研究院内中研福德宮、劍潭福正宮、圓山福壽宮、圓山保正宮、圓山地藏庵、臨濟護國禪寺、中山行天宮、中山双境廟、中山新興宮、芝山巖聖佑宮、石碑福德祠、大同普願宮、大同福興宮、大同真聖堂、士林神農宮、士林慈誠宮、士林街福德祠、士林夜市福德宮、士林至善路仁福宮、大安泰安宮、蘭興福安宮、大稻埕碼頭天水宮、關渡宮、關渡玉女宮、猫空天恩宮、台北指南宮、北投萬應公祠、北投普濟寺。

〈新竹〉北埔慈天宮、新竹都城隍廟、新竹法蓮寺。  
 〈新北〉三峡六聖公祠、三峡宰樞廟、清水巖祖師廟、  
 三峡福安宮、三峡興隆宮、野柳保安宮、營盤福德宮、  
 福宮協天宮、深坑玄天宮、深坑集順廟、深坑福德宮、  
 淡水和衷宮、淡水聖江廟、淡水幸海宮。  
 〈南投〉九族文化村内福德正神祠、竹山紫南宮、竹  
 山福德正神祠、埔里恒吉宮。  
 〈基隆〉大仏禅院、佛光山極楽寺、仙洞巖。  
 〈烏來〉寶林山妙心寺、烏來福德正神祠。  
 〈台中〉南屯萬和宮、寶覺寺、新北里福德堂、大坑  
 圓環福德祠、北屯聖壽宮、台中孔子廟。  
 〈嘉義〉嘉邑城隍廟。  
 〈高雄〉前金三鳳宮、左營啟明堂、左營慈濟宮。  
 〈屏東〉鵝鑾鼻保安宮、大梅福龍宮、大梅池福宮、  
 車城福安宮。  
 〈台南〉關子嶺福德宮、安平開台天后宮、海尾鎮安  
 堂飛虎將軍廟、海尾朝皇宮、延平郡王祠、台湾府城  
 隍廟。  
 〈宜蘭〉礁溪協天廟、礁溪德陽宮、武宮廟（大樹公）、  
 宜蘭文昌宮、宜蘭碧霞宮（岳武穆王廟）、宜蘭城隍  
 廟、宜蘭昭應宮、宜蘭新民堂、宜蘭五穀廟、宜蘭鎮  
 南宮。  
 〈花蓮〉吉安慶修院、慶豐城隍爺祠、天祥祥德寺。



台北天母 三玉宮

これらの祠廟、中でも自宅近くにあった天母三玉宮へ足繁く参拝して得られた知見は、つきつめればごく単純です。

実は台湾の祠廟には「陰廟（インミャオ）」と呼ばれ、怖れられるものがあります。「神ではなく非

業の死を遂げた鬼（ガイ。靈魂）を祀っている」、「未婚のまま死んで一族の墓に入れられない女性を祀っている」、「深夜に詣でると必ず願いはかなえられ、代わりに何かを奪われる」、「金儲けを目的とするニセの祠廟である」、などといった説明が為され、私の見た祠廟にも「陰廟ではないか？」と詳しい人から注意されるものがありました。なお、その廟は先の祠廟のまとめには含めていません。

しかし歴史的に考えてみれば、現在台湾のみならず華人社会で広く尊崇される媽祖＝天后＝天上聖母も、もとは10世紀に未婚のまま早世した林默という女性でした。つまり「陰廟」も今まさに新たな信仰の対象へと昇華しつつある（のかも知れない）、しかしいまだ一故人に過ぎない人物を祀っている不安定な状態を指したものであり、こうした存在の出現する、一見猥雑で、時にオカルト的でもある台湾の宗教文化の一面こそ、前近代中国に息づいていた信仰の「動態」に近いはずだ――

言ってしまうと私の収穫とはこれだけのことでした。それでも今後、王朝の把握する限りのことしか基本的には書かれていない前近代中国史料を紐解く時にも、祠廟については台湾の活気ある動態を思い描くことで、より豊かな歴史像の手がかりにすることができると、と、ひそかに心強く思っているのです。

## 最後に

以上、一年を顧みて改めて思うのは、当初私自身が台湾の独自性についておよそ理解していなかったこと、遅ればせながらうかがい知ることのできたそれが国際社会においても中国史研究においてもきわめてユニークかつ貴重であること、です。

ここで、貴重、と言うのには、少々打算的な考えがまじっています。現在、中華圏と呼ばれる中で、台湾ほど日本に対して友好的な社会はありません。私個人や福大の学生、あるいは福岡大学全体にとって、今後の提携先としては台湾の社会や大学こそ有効な相手ではないか、と思うのです。

ともあれ、こうした経験を私に積ませてくださった福大の方々、とりわけ留守中の事どもを快く引き受けてくださった歴史学科の方々に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

## オークランドでの在外研究

薬学部准教授 佐藤朝光

2016年4月から1年間、ニュージーランドのオークランドにあるオークランド大学医学健康科学部に在外研究員として滞在させて頂きました。そこでは、海外の薬学教育の大きな変化に接する素晴らしい時間を過ごすことができました。

### オークランド

太平洋の南側に位置するニュージーランドは、北島と南島の2つの島からなります。オークランドは、北島に位置し、人口は約140万人で、ニュージーランド最大の都市です。そして、商業や貿易の中心地として発展しています。オークランドは火山帯上に位置しており、近郊に多くの火山円錐丘が存在しています。そのうちの1つであるマウント・イーデンは、市街地の近くにある有名な火山円錐丘です。以前は、マオリと呼ばれる先住民の居住区でしたが、現在では、気軽なハイキングコースのある丘として人々の憩いの場所となっています。また、オークランドに面するハウラキ湾に浮かぶランギトト島は海底噴火により作られた火山島として有名です。オークランドと福岡市は、つながりが深く、1986年より



グラフトン橋から眺めるランギトト島

姉妹都市の関係となっています。2016年は、姉妹都市となってちょうど30周年のため、オークランド市内のタウンホールなどで、福岡市を紹介するイベントが開催されていました。

### オークランド大学

オークランド大学は、1883年に設立されたニュージーランドを代表する大学の1つです。2016年には、シティ、タマキ、ニューマーケット、グラフトン、エプソムの5つのキャンパスがありました。グラフトンキャンパスは、オークランドの市街地より徒歩15分程度の便利な立地にあります。このグラフトンキャンパスに、医学健康科学部はあります。医学健康科学部は、薬学科（School of Pharmacy : SoP）以外に、医科学・医学・看護学・眼科学・公衆衛生学の学科から構成されています。SoPの設立は2000年で、ニュージーランドでは2番目となる新設の薬学科です。それ以前は、南島にあるオタゴ大学に唯一の薬学科があるのみでした。現在、John Shaw 教授や

Janie Sheridan 教授を含め約40名の教員が精力的に教育や研究に携わっています。教員は、ニュージーランド出身者以外に、イギリス、南アフリカ、インド、中国の出身者がおり、国際色の豊かな環境でした。



医学健康科学部の校舎

## 研究生活

ニュージーランドで働く薬剤師となるためには、ニュージーランドやオーストラリアの薬学科において、Bachelor of Pharmacy (BPharm) のカリキュラムを修了し、2年以内にインターンシップを修了しなければなりません。SoP の BPharm のカリキュラムは4年制で、1年目に教養課程を学び、2年目より専門課程に入ります。日本の薬学教育は、2006年度より6年制に移行しましたので、渡航前の私は、SoP のカリキュラムは、4年制だった以前の日本の薬学教育に近い制度を想像していました。しかし、実際に私が参加した授業は、4年制の薬学教育と大きく異なる体系でまとめられていることに驚かされました。実は、SoP では、臨床に向けた実践的な教育の時間数を増やすために、2015年度に入学した学生より新しいカリキュラムに移行しました。そして、2016年度は、新しい専門課程が初めて開講された年度で、その授業に私は参加したのです。新しい専門課程は、“皮膚学”や“呼吸器学”などの項目により授業を体系化し、生理学や薬剤学などを専門分野とする複数の教官によって、各項目の授業が横断的に分担して行われることを特徴とします。実際に授業に参加すると、良く考えられた専門課程の授業体系であり、このような項目に基づく専門課程により薬学の知識を分かりやすく教えることができることに感心しました。毎月行われていたカリキュラム委員の会議に参加させて頂いたことは、新しいカリキュラムの特徴をつかむために大変役に立ちました。毎回、この会議の内容を聞き漏らささないように必死に参加したことは、今となっては良い思い出です。

オークランド大学は、e-learning システムを全学部を導入するなど、積極的に ICT を活用していることは印象深い点でした。e-learning システム以外の ICT として、Google docs などのクラウドが学生へ配布され、ケアプランを作製するワークショップの授業にうまく活用されているのを目の当たりにした時は、良く考えられていると唸らされました。また、ニュージーランドは、国の成り立ちの経緯から、国をあげてマオリの文化を守ろうとする運動が勧められています。この運動は、オークランド大学全体においても行われていました。例えば、講義は英語で行われますが、イベントの挨拶などはマオリ語が使われて

いました。SoP でも、カリキュラムに、マオリの健康に関する集中講義が含まれていたり、マオリの非常勤講師による講義などが取り入れられており、日本にはない独特の取り組みとして深く印象に残りました。

2008年より、福岡大学薬学部の学生の希望者は、ニュージーランド薬学研修として、SoP を訪問する交流を続けています。この訪問により、のべ120名以上の学生が訪問しています。2016年も、福岡大学薬学部の11名の学生が、SoP を訪問してくれました。今回は、John 教授の計らいもあり、ケアプランを作製するワークショップに薬学部の学生が合流することができました。この機会が、学生にとって、貴重な経験になったことを願っています。

キャンパス外の活動では、SoP の教員の自宅でのクリスマスパーティーに招待していただいたり、ラグビーのニュージーランド代表であるオールブラックスの試合に招待していただいたりと、在外研究中は本当に充実した時間を過ごすことができました。

## 最後に

SoP の教員の公私にわたる親切さや、いつも前向きな姿勢に感謝することが多く、短い期間でしたが貴重な経験を数多くすることができました。今後、この1年間で得た貴重な経験を教育・研究に反映させていけるように努力を重ねていきたいと思えます。

最後になりましたが、在外研究の機会を与えて下さった福岡大学、薬学部教授会、国内外でサポートして下さいました方々に心よりお礼を申し上げます。



## ラスベガスでの在外研究における365日

情報基盤センター准教授 中國 真 教

### 1. ラスベガスについて

ラスベガスは、アメリカの西部に位置するネバダ州に属し、州の南端に位置します。ネバダ州の土地の大半は砂漠であり乾燥した気候であるため、日本のような湿気による不快感はなく、夏の日中は50℃近くになることはありますが日陰は涼しく快適です。ラスベガスは巨大カジノを有する街として世界的に有名ですが、意外にも福岡市と共通する部分が多くあります。まず、空港と街が近い点です。次に、砂漠の砂が降ってくる点です。そして、ローカルバスの路線網が充実している点です。他にも共通点がいくつかあり、何となく親しみやすい街と言えます。異なる点と言えば、海に接していないことです。海釣り好きな私にとっては、その点はかなり苦痛でした。

### 2. なぜ、「ラスベガス」を選んだのか？

在外研究への出発前はこの「問い」を受けることが非常に多く、「ギャンブルの街なのにラスベガスには受け入れ先となる大学なんてあるの？」という質問を頻繁に受けました。ラスベガスを選択したのは、「ラスベガスに住みたい」という願望が以前からあったという理由もありますが、在外研究中に取り組みたい研究について良き助言者となり得る先生がラスベガスにおられたこと、幾度も訪れたことがある街であるため多少の土地勘があり安心感もあったことがあげられます。今回の在外研究では、乳児を含む家族5人での米国滞在となりましたので、街の治安についても行き先を選ぶ際に考慮しておく必要がありました。

### 3. 在外研究の場として選んだネバダ大学について

今回の在外研究の場となった大学は、ネバダ大学ラスベガス校です。ネバダ州の州立大学として設置

された大学であり、州内にはネバダ大学リノ校も設置されています。州立大学であることもあり、専攻は幅広くカバーされており、その中には例えば、ホテル経営学を学ぶプログラムがあります。ラスベガスはカジノが有名であると同時に巨大ホテルが建ち並ぶ観光都市です。このように、地域の産業の発展が大学運営にも反映されています。

在籍する学生数は多く、学部生と大学院生をあわせると3万人近くとなります。ところが、広大なキャンパスであるため人口密度が低く、3万人もの学生が通っているとは思えません。しかし、イベントなどが開催されると、キャンパスには多くの学生が集まり、学生数の多さを実感できます。また、キャンパスに隣接する学生用駐車場も広大であり、その点からも学生数の多さを実感できます。



ネバダ大学ラスベガス校の風景

### 4. ネバダ大学滞在中の研究活動

前述のような環境において取り組んだ私の研究は、「IT を用いて学修活動などを支援する」というものでした。支援の対象となる学生は健常者のみならず、障がい者も視野に入れた研究です。残念ながら日本

では、障がいを持つ学生への支援が十分とは言えない部分が多く、障がい者に対する理解と支援が日本よりも進んでいる欧米に滞在し、前述の研究を推進することの必要性を感じました。滞在中は、取り組む研究の内容を一部に限定せず、ネバダ大学を含む米国の大学に在籍している学生はどのような背景を持ちながら入学し、各学生が抱える問題に対して大学側はどのように支援を行っているのか、という点について調査を行いながら研究に取り組みました。私が所属した研究室の主宰者である Yfantis 教授は、私が取り組もうとしていた研究の専門家ではありませんが、Yfantis 教授は IT について基礎研究から応用研究まで幅広く取り込まれ、幅広い経験を持たれている先生です。これまでに得られた知見を惜しみなく提供していただきました。



博士号取得者のガウンを説明する Yfantis 教授

Yfantis 教授のもとには、Ernesto さんという博士課程の学生が在籍しており、1年後には博士号の取得を控えておりましたので、私は Ernesto さんの研究指導にも加わりながら、教授と学生さんと私の3名共同での研究も推進しました。私自身の研究を進める上で必要となる技術について、彼らは豊富な知見と高い技術力を備えており、共同研究を通じて教えることで、非常に充実した共同研究を行うことができました。これらの活動を経て、Ernesto さんは無

事に博士号を取得し、その直後、半導体素子メーカーとして世界的に有名なインテル社へ就職すると同時に米国の大学教員としてのポストも得ることができました。指導に従事した期間はそれほど長くありませんが、指導した学生が教員ポストを得たことに非常に大きな喜びを得ることができました。

## 5. ラスベガスにおける日常

時期によっては日本人観光客が多く、特に、国際家電見本市（CES）の開催時期は多くの日本人がラスベガスを訪れ、街中で日本人を見かけます。しかし、ラスベガス在住の日本人はそれほど多くありません。このような環境であるため日本人学校は存在せず、我が家の長男（17歳）と長女（14歳）は現地校に通うことになりました。

様々な戸惑いを覚えながら子どもたちは現地校に通っておりましたが、特に「中学校におけるノートパソコンの必携化」については興味深い反面、戸惑うことが多々ありました。入学した日にノートパソコンが無償で貸与され、授業中はもちろんのこと、宿題もパソコンを用いる課題が出され、宿題の提出もパソコンで行うというものでした。パソコンを使った授業に慣れない我が子に対し、私が指導することも多々ありました。一方、高校においてはノートパソコン必携化がなされておらず、必要であれば個人のパソコンを持ち込む形です。授業によってはオンラインにて自宅から受講できるものもあります。ところが、オンライン授業の中には、実習を伴わずの「体育」などが含まれ、教育カリキュラムには疑問を感じることもありました。しかし、高校では課外活動が活発に行われ、授業以外の場でも教育に注力されています。例えば、ロボット開発とそれを用いた競技会の開催が良い例です。このように活発に教育が行われている一面もあり、我が家の子どもたちはこのような中で、充実した学校生活を送ることができました。

休日にはグランドキャニオンなどの観光地を訪問したり、夏休みには自動車で行き先に出かけたりする機会もありました。特に、サンディエゴとシアトルの間（福岡市から札幌市までの道のりと同程度）を自動車で行く家族旅行は、米国滞在中における貴重な思い出となりました。

家族5人での米国滞在は楽しいことも困惑することもあり、一生忘れることのない貴重な経験となりました。このような貴重な機会をくださった福岡大学、米国滞在においてご協力いただいた皆様、受け入れ先となりましたネバダ大学と Yfantis 教授に、この場をお借りして深くお礼申し上げます。



高校生が開発したロボットを披露する様子



グランドキャニオンへの家族旅行

